

蒼

souten

天

発行日 2025年7月1日
社会福祉法人 青空会
生活介護事業所あおぞら
〒852-8143 長崎市川平町 1132-2
TEL095-843-9001 FAX095-843-8203
グループホームまんとん
〒852-8143 長崎市川平町 1132-26
TEL095-865-7570 FAX095-865-7571
メール aozora@sa8.gyao.ne.jp
ホームページ <https://aozoraland.com/>

宮嶋健一 前理事長 追悼号

◎はじめに

日頃より、社会福祉法人青空会の活動に
対しましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼
申し上げます。

このたび、令和7年3月30日 当法人
宮嶋健一前理事長がご逝去されましたこと
を謹んでご報告申し上げます。

つきましては、宮嶋健一前理事長の在りし
日を偲び、追悼号を発行することといたしま
した。

改めまして、宮嶋健一前理事長のご遺徳を
偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。



生
あ

◎追悼のことば

社会福祉法人青空会
理事長 宮嶋 耕太

去る3月30日、社会福祉法人青空会 前理事長であり、私の父でもある宮嶋健一が、静かにその生涯を閉じました。ここに謹んでご報告申し上げますとともに、生前に賜りました格別のご厚情とご支援に、心より御礼申し上げます。

あおぞらは本年、創立31年を迎えました。開所当初より父は先頭に立ち、幾多の困難を乗り越えながら、法人の礎を築いてまいりました。決して平坦ではなかったその道のりの中で、父は多くの素敵な出会いと皆様のご支援に支えられながら、ただひたすらに利用者の皆様の幸せを願い、歩みを進めてまいりました。

「すべては利用者のために」「利用者が主人公である」「ご家族の思い・願いをともに分かち合う」。これらの言葉は、父の揺るぎない信念であり、その想いは今も職員一人ひとりの心に深く刻まれております。

法人理念である「暖かであること、穏やかであること」を常に心に抱き、父はどのような状況にも真摯に向き合い、利用者の皆様お一人おひとりに寄り添い続けてまいりました。その姿はまさに、青空会にとっての“大きな太陽”であり、いつも私たちを明るく、力強く照らし続けてくれた存在でした。

その背中を見て育った私が、いまこうして父の後を継ぎ、青空会の舵を取らせていただいております。父が人生をかけて築き上げたこの「あおぞら」を守り、さらに高く広げていくことこそ、私に与えられた使命であり、父への最大の恩返しであると、信じております。

利用者の皆様の笑顔のために、そしてすべての方が明日に希望と喜びを抱けるように。これからも、ひとつひとつの支援を丁寧に、誠実に積み重ねてまいります。

どうか今後とも、変わらぬご支援とご厚情を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。
結びに、父・宮嶋健一のご冥福を、謹んでお祈り申し上げます。



◎ご家族様から追悼のお言葉

前理事長 宮嶋健一様のご逝去を慎み心から哀悼の意を捧げます。

三月末の日曜日、親子でゆっくり過ごしていたところに、訃報の連絡が入りました。前理事長の病状報告は、受けていましたが、突然のことに、とても驚きました。

昨年「あおぞら30周年」記念式典では、多くの来賓の前で、とても心暖まるご挨拶をして下さったことを覚えています。

あおぞらの理念である「暖かであること、穏やかであること」前理事長は、いつも子供たちと活動を共にし、とても大きな包容力とやさしい笑顔で接して下さいました。

私たち親子にとっても心和らぐ居場所を作して下さいましたこと、また、たくさんの思い出と愛情を注いで下さったこと、直接お伝えできませんでしたが、感謝の気持ちでいっぱいです。

これからは、前理事長のご遺志をしっかりと受け継がれた、現理事長 耕太さんとスタッフの方々と共に、子供たちが、自分らしく、楽しく過ごせる日々が一日でも長く続くよう頑張っていきますので安心して天国より見守って下さい。

本当にお世話になりました。

あおぞら家族会
会長 田淵

満開のさくらのころに
師逝きぬ
天晴れなりしその生き様よ

十五の春は泣き別れと言われた世代です。石鹼工房あおぞらの開所をどれほど待ち侘びたことか。

宮嶋先生はこの子供達の為に全力で走り続けて来られました。感謝の気持ちでいっぱいです。

本当にありがとうございました。ゆっくりとおやすみください。そしてあおぞら、まんてんを見守っててください。

横田

宮嶋様には全力で「あおぞら」のような大きなお心で長年、私達を支えて下さり誠に感謝申し上げます。

飛永

開所時は大きな家族の様でした。

当初は粉石けんを作っていたので教えて頂いて作業を手伝ったり商品を販売したりしてました。

息子は前理事長が大好きでした。私が入院した時も入所施設に預けるつもりでしたが自宅で預かって頂き心強かったです。

前理事長の事を考えると色んな事が思い出されます。

前田

人生で最も悩み苦しんでいた時期にあたたかく手を差し伸べていただき、親子共々救われました。

宮嶋先生に出会えて本当に良かったです。深く深く感謝しております。ありがとうございました。

吉田

3月30日出先で先生の急逝の報をうけ、とうとうこの日が来てしまったというやるせない思いでいっぱいでした。

子供の高校卒業後の進路は是非とも地元でもある“せっけん工房”にと思い門を叩きましたが、快く受け入れて下さり、前途が開けた思いでした。

先生はいつも子供ファースト どんな時も子供達に寄り添って下さいました。

13年前、子供が肺炎で入院した折には、朝・夕様子を見に来て下さり、不安でいっぱいだった私達はとても心強く、言葉では言い尽くせない程有難く、感謝でした。

あおぞらは今年31周年を迎えました。先生が心血を注いで築き上げたあおぞらは耕太さんに立派に引き継がれ、子供達も安心して毎日を楽しく過ごせています。

先生、大変お疲れ様でしたと共に、これからも空の彼方から皆を見守って下さいませ。 合掌
永井

◎お別れ会

令和7年4月1日、思いでの沢山つまった作業所でお別れ会を行いました。

遺言で、「派手なお別れの会はしなくていいからね～」と言われていたにもかかわらず、どこかで話しを聞かれた方々が足を運んで下さり、気付けばたくさんの方にお集りいただいていた。会場では思い出話に花が咲き、生前、宮嶋さんが希望し、念願叶って作っていただいたあおぞらの曲「あおぞら～明日はきっと強くなる～」もみんなで歌いました。

仲間たちも思い思いに、宮嶋さんとの最後のお別れをしていました。

宮嶋さんは、大きな体でいつもみんなを暖かく包み込んでくれて、満面の笑みでいつもみんなに微笑んでくれました。利用者はもちろん、職員も「今日もあおぞらは楽しかったな～明日はどんなことがあるのかな～」と、明日に期待しながら眠りにつける。そんな穏やかな場所を身を粉にしながら築いて下さり、ありがとうございました。

これからもあおぞらと仲間たちのことをどうか見守っていて下さいね。

あおぞら一同



◎宮嶋健一前理事長と社会福祉法人青空会の軌跡

宮嶋 健一前理事長は、1947年10月11日、長崎市香焼町にお生まれになりました。長崎商業高等学校を卒業後、当時の養護学校の教諭を志して長崎大学教育学部に進学、熊本大学教育学部に院進し、養護教諭養成課程を専攻されました。

その後、静岡県内(御殿場市・駿東郡)の知的障がい者支援施設において通算21年間勤務され、貴重な現場経験を積まれた後、故郷・長崎に帰郷されました。帰郷後は、長崎市川平町に小規模作業所「石けん工房・ワークショップ青空」を開設され、法人化を経て社会福祉法人青空会を設立。理事長として長年にわたり知的障がい者支援に尽力され、現在の「生活介護事業所あおぞら」へと発展させてこられました。

知的障がい者支援の道を歩まれるきっかけとなったのは、著名な教育心理学者・牛島 義友氏との出会いです。氏は御殿場コロニーの創設者でもあり、同施設の理事長でした。その牛島氏から「御殿場コロニーで働いてみる気はないか」と声をかけられたことが、障がい者福祉に半世紀以上身を捧げる人生の出発点となりました。

御殿場コロニーに4年間勤務され、その後、牛島氏の教え子である村井 清氏が開設した駿東学園に移り、17年間勤務されました。施設運営の知識や実務を深められるとともに、入所施設で完結してしまう支援の在り方に疑問を抱くようになり、入所者が地域と関わることの大切さに気づかれました。「限られた生活の枠から入所者の目を外へ向ける。」、実際に入所者を外部の作業所に送り出した際の生き生きとした様子を通じて、その考えは確信へと変わっていきます。

こうした思索の末に至った結論は、「知的障がい者が地域の人たちと関わるができるような施設運営ができないか。これまでのように知的障がい者を施設や家に囲い込んでいては、地域の人たちとの触れ合いがないままに、障がい者への間違った印象が消えず、お互いに同じ社会の一員だという認識がいつまでも育たない。そもそも就労が難しい重度障がい者に関しては、通所をあきらめざるを得ない状況である。知的障がい者が地域と関わり、障がいの程度にかかわらず誰もが気軽に通える場をつくりたい。その拠点を長崎に帰ってつくりたい。」という強い想いでした。この想いを村井氏に伝えたところ、「自分の信じる道を行きなさい」と背中を押され、長年の夢の実現に向けて長崎への帰郷を決意されました。

帰郷後は「入所の施設ではなく、障がい者が自宅から通って自立を促す施設をつくり、社会に触れることでいろいろな刺激を受け、みんなが生き生きするスペースにしたい。」と、理解を求めながら土地探しに奔走。次第にその熱意に心を動かされた人々の支援の輪が広がり、最終的には長崎市の協力を得て川平町に用地を確保。ご自身で材木を運び、大工とともに汗を流して建物の建設に携わり、1994年、ご夫妻の退職金を元手に小規模作業所「石けん工房ワークショップ青空」を開設されました。

活動内容は、駿東学園時代に趣味の登山でよく訪ね、長野県松本市の恩師 林 道夫氏の元で学ばれた廃油を用いた無添加石けんづくり。当時は行政からの補助は受けられず、就労が難しい重度障がい者への支援は困難で、多くの重度障がい者が通所をあきらめざるを得ない状況でしたが、「もっとたくさんの重度障がい者を通して日中の活動をさせてあげたい。」という強い思いのもと、支援を続けられました。

2006年、障害者自立支援法の施行を受け、翌年「生活介護事業所あおぞら」として再スタートを切りました。制度改革が追い風となり、自立支援給付を通じた活動が可能となり、ようやく「障がいの程度に関わらず地域で活動できる場を」という思い描いた理想が形となりました。

その後も、自治会や地域との関係づくりに尽力され、施設の利用者や職員が地域と関わり、刺激と成長を得られるよう、あらゆる面で尽力されました。

薫陶を受けた駿東学園の村井氏から、こんなことも教わっています。「毎日寝る前には常に障がい者のことを思い、明日の喜びに期待して眠りなさい。」と。

この教えに通じ青空会では、利用者や職員が毎日眠る前に「今日は楽しかった。明日も楽しみだ。」と明日の喜びに期待して眠りについてもらえるような毎日が送れるよう、ビジョンとして受け継いでいます。

亡くなる数日前、宮嶋前理事長はこう語られました。

「決して大きい施設ではないが、自分が理想とする施設をつくることができ、思い残すことはない。皆さんに感謝している。」

長い時間をかけて築いてこられたもの、教えて下さったことは今日もなお、あおぞらに関わるすべての人々の胸に深く刻まれ、生活の中に生きています。

宮嶋 健一前理事長のご生涯に心からの敬意を表するとともに、これまでのご尽力に感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



◎思い出



けんちゃんへ
ありがとう♡
大好き♡





健ちゃんへ
お世話になりました。優しく
してくれてあ
りがとう。



けんちゃんえ
あおぞらたのしい
ありがとう。